

---

# 記憶になった日常

氷柱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

記憶になった日常

### 【Nコード】

N7600Z

### 【作者名】

氷柱

### 【あらすじ】

ブイズ達の日々の日常を描いた物語

ほのぼのでもふもふな生活を一緒に過ごそうよ

くクリスマスイブ　前編　12/24

「クリスマスだ！クリスマスウー！」

「正確にはクリスマスイブだけだね。」

はしゃぐサンダースと冷静に突っ込みをいれるブースター。

「今回こそサンタさんがプレゼント出来ないようなものを考えてやるうー！」

Yahooo!とわめきながらサンダースは部屋を疾走してそのま  
ま外に飛び出して行った。

全く…朝からよくあんなに元気だね。

はしゃいでいるサンダースに呆れていながらもブースターもクリスマスを楽しみにしていた。

「前回の様にならなければいいけど…」

やれやれとでもいうように首をかしげてブースターは自分の部屋に戻って行った。

ーーーーー。

「アゝクウゝアゝ！」

「うん？」川の中で優雅に朝の水浴びをしていたシャワーズは自分の名前が聞こえてきた方を向いて見る。

すると、此方に向かって猛スピードで走ってくるサンダースの姿が…  
「ストップ！ストップだつて！」

アクアの必死の制止もサンダースには聞こえなかったようだ。  
サンダースはそのまま川に体ごと突っ込んだ。

「キヤーッ！！！」

川に電流が流れてアクアは感電してしまう。

「あつ！　ゴメン、ゴメン！」

サンダーズは川の中に突っ込んでからようやくその事に気付いたように急いで川の中から出てくる。

アクアもその後に這いずりながら川の中から出てくる。

「ううっ…。ライ…朝からそんなにはしゃいでどうしたんですか…？」

地面に顔を突っ伏しながら尋ねてくる。

「何って今日はクリスマスだよ！ 夜にはサンタさんが来るんだよ！」

「そういえば今日はクリスマスイブだったね。でも夜までまだ時間はあるよ？」

そう、今日は12/24 クリスマスイブの日。

夜にはサンタさん…まあ、デリバードさんがプレゼントを運んでくれるんだけど ライトは毎回はしゃぎ疲れて寝てるんだよね…。だから今でもサンタさんの事を信じてるみたい。

「今回は何を頼むの？ 前回はたしか1つの鉄球だったよね？」

そう、前回ライトは1つの鉄球をサンタさんに頼んでいた。

本人曰く、『サンタさんはトナカイで空を飛んでやって来るんだ！

だったら相当重たい物を頼べば空も飛べなくなる！』とのこと。

翌日、ベッドの傍に掛けていた靴下は無惨にも破れ、その下の床には穴が空いていた。ライトの部屋は2階にある為、その真下にある1階のストラの部屋が落ちてきた鉄球によりかなりの被害を被っていたんだよね…

「そうなんだよね。前回は重要な事を忘れてたんだよ！ 飛べなくても雪の上を滑っていけばいいんだ！」

いや、突っ込みどころ満載なんですけど！

「それより…」

ライトは先程から突っ伏しているアクアにズイツと顔を寄せる。

「さっきはゴメンね。その…やっぱり痛かった？」

いままでのむじゃきな感じと違って変わって今度は両前足を顔の前でモジモジさせている。

「そつ、そんな事ないよ！ 確かに痛かったけど…」  
アクアは慌てて顔を上げて応えるが、流石に先程の電撃は痛かったのか顔をしかめる。

「やっぱり？ ちょっと待ってて！ オレンの実とってくるから！」  
「えっ！？ 別にいいよ！」

アクアの言葉を聞く前にライトは森の方に走り去ってしまった。

「別にいいのに…。それにしてもさっき、ライの顔近かったなあ…  
…って、何考えてるんだろわたしノノノ」

いつの間にかライトとのやりとりを思い出していた自分に気付き、  
アクアは顔を赤らめながら首を振る。

「……………」

「この位でいいかなつと」

リーフィアはくわえていた木の実を置き、上機嫌で呟く。

此処は『緑採りょくさいの森』。

木の実をはじめ、薬草や貴重な種など様々な食料や素材が採れる場所だ。

森の中央辺りは少しあけた場所があるので、そこでバトルやイベント等のもようしものをやったりする。

「皆が好きな味の木の実は採ったし、そろそろ帰ろうかな」

木の実を下に敷いていた葉っぱで軽く包み、持ち帰ろうとした時  
聞き慣れた声が耳に飛び込んできたので目を向けると…

「オレンの実〜！」ライトが土煙をあげながら走っていた。

「おい！ ライトー！ どうしたの〜？」

リーフィアが傍を通過しようとしたライトを呼び止める。

「あつ！ リーツ、フ！ オレンのみつ、持っていない？」

ライトがぜいぜい息をきらしながら尋ねる。

「そんなに慌ててどうしたの？ もしかして、誰か怪我したの!？」

走ることが得意なはずのライトがこれだけ息をきらすほど急いでいるということは、余程のことがあったのだろっ、リーフィアのリーフは目を大きくあけて驚いている。

「ああ、アクアに怪我させちゃったんだ！」

「えっ！？ アクアが！？」

「とりあえず、早くっ！」

リーフは木の実を包んだ葉っぱをくわえて 走っていくライトの後を追った。

「……………」。

「ライト、大丈夫かな……」

アクアはライトが戻って来る迄 水に入って体を癒していた。

アクアは自分のことよりも、ライトの事を心配していた。正確にいうと、ライトがまた誰かに迷惑をかけていないか心配しているように、ライトが走り去った森の方向を何事も起こらないように祈りつつ、ぼお～と眺めていた。

そして、数分の後にはまた黄色いものがこんどは此方に走ってくるのが見えた。

「うそっ！？ もう戻ってきた？」

此処からあの森まで 約5キロほどあるというのにライトはもう戻ってきたようだ。

そして、その後ろには緑のものも見える。

「ゴメン！ 待たせた！」

「アクア！ どこケガしたの！？」

ライトはアクアの前に滑り込みながら止まり、リーフも傍に木の実を置いて顔を近づける。

「えっ？ リーフまで？」

神様、悪い予感が当たったようです。ライトは早速、他人に迷惑を

かけてしまいました！

「ライトがアクアがケガしたっていったの。何処が痛むの？」

ライト…また何か勘違いさせること言ったようだね。

「いや、別に…そこまでたいしたケガじゃないよ…。実は…」

アクアはライトとの事の経緯<sup>いきさつ</sup>を話す。

「なあ…んだ。って、またアクアに迷惑かけてたの？」

「うつ…ごつ、ゴメン…」

「別にいいよ…」

これも何時ものやりとり。

サンダースがはいで誰かがその興奮状態の体にあたり、感電する…電気に弱い水タイプだから他のメンバーの中でも私が被害をうけることが多い。

「とりあえず…ハイツ オレンの実。」

リーフが集めた木の実の中からオレンの実を探りだし、渡してくれる。

「あつ、ありがとう…」

なんともないといったが、体は全身 針で刺されたように痛むので素直にオレンの実をかじる。

モグモグモグ…。

体のだるさと痛みが少しひいていく。

「ふう…、ありがとう。だいぶ楽になったよ。」

アクアは水をしたらせながら川の中からあがってくる。

「よかった… アクアに危険なことが起こってなくて。」

アクアが川から上がってくるなりリーフはアクアを抱きしめる。

「ちよつと…リイ」

「べつにいいじゃん」

そばではライトが気まずそうに俯いている。

「あつ、そろそろお昼御飯の時間じゃない？ 家に戻るっ？」

この状況を打開するためにアクアは話をきりだす。

「う…ん、そうだね そろそろ帰ろっか！ ほらっ、ライも帰るよ

！

「へっ！？あつ、お、おうっ！」

ライトは急に自分に話が回ってきたためあたふたしている。

リーフは木の実を包んでいる葉っぱをくわえ、ライトの前に置く。

「男の子なんだから頑張ってね」

「……………」アクアとリーフは会話に花を咲かせながら楽しそうに歩いていた。

それに対し、後ろにはライトがついていったが口に物をくわえていたため何も喋ることが出来ず、ライトにとってはただの苦痛な時間ではなかった。

……………。

「つつ、着いた…。」

玄関に着いた瞬間にライトは倒れこんだ。

「お疲れお疲れ…」

リーフは木の実を持って台所の方に走って行った。

結構重たい筈なのに、軽々ともっていきやがった…アイツ だよな？ 何処にあんな力が…

サンダースは冬の寒気で冷えた床の上でそんなことを考えていた。

「ライト、こんな所で寝てたら風邪ひくよ？」

アクアが心配そうに尋ねてくるので 荷物運びで疲れた体を頑張っ  
て起こす。

「わかったよ…。」

そう呟き、ライトはリビングにふらつきながら歩いて行った。

……………。

「お昼だよ…」

ブースターのストラの声が聞こえてきた瞬間、疲れて寝ていたはず



のライトは飛び起き、食卓があるダイニングルームに走って行く。  
食卓といっても“こたつ”だけど。

「飯〱〱〱」

サンダースがダイニングルームに着いた時にはまだストラしかいなかった。

「やっぱり、今日もライが一番乗りだね。　じゃあ好きな木の実取って待つててね。」

ライトは“マゴのみ”を取ってこたつの中に入って頭だけをだす。  
「やっぱりこたつは最高〱。」

サンダースが和んでいると、他のメンバーも続々と部屋にやって来た。

「えっ、もしかしたら私達が一番乗り？」

「バカな：今夜はホワイトクリスマスになりそうだな。」

「あれ〱珍しい。ライト先に来てないんだ。」

エーフィのアルトとブラッキーのルナ、リーフが入って来た。アルトとリーフはライトが先に部屋に来てない事に驚いている。

「既にそこにいますよ？」

今度はグレイシアのレイクとアクアが色々な荷物を持って部屋に入ってくる。

こたつの周りに敷かれている座布団の1つがふくれ、その端から耳が見えている。

「なあ〱んだ、やっぱりライトの方が早かったんだね。」

「もちろん！」

ライトは座布団の下から返事をする。

「これで皆集まった訳だし、お昼御飯食べながら午後の仕事の割り振りをやって行くよ。」

ストラも“フィラの実”をとって座布団に座る。

いつの間にかライトもこたつの中から出てきている。

「じゃあ、いっただきま〱す！」

「……………」。

「じゃあ、先刻話した通りの仕事をみんなこなしてね。かいさ〜ん。」

ストラの一言で昼食を食べ終えたみんなはそろそろと部屋を出ていった。

…二匹を除いて。

「何で俺も残らなくちゃなんないんだよ…ブツブツ」

「まあまあ、つべこべ言わず、台所にレッツゴー」

文句をいいつづけるライトをリーフは台所まで連行する。

「あつ、止めろつて／＼／＼ わかった、分かったから！」

ライトは恥ずかしがって暴れるが、リーフの力には敵わずそのまま台所まで引つ張つてこられた。

「でも、何で俺が料理係なんだよ…他にも適任はいくらでもいるだろ…アクアとかスウとか…」

リーフが材料を取りに行っているため、いまは誰もいない台所で一人ぼやく。

俺も去年通り ツリーの飾り付けが良かったなあ…

去年のクリスマスの思い出に想いを馳せているうちにリーフも材料を持って台所に戻ってきた。

「ケーキは私を作るから、ライトはポフィン作りね」

「ムリ！ 無理、無理！絶対無理！」

てつきり料理の手伝いをするかと思っていたライトは全力で否定する。

「なぜばなるつて」

「いや絶対なんないつて！ 俺、料理作ったことないし！」

「わかんないよ？ ライトの前世、実は伝説のポフィンマスターかもよ？」

「何その無理矢理な設定！」

「ポフィンの作り方教えるからちゃんとみててね」

ライトの反論は受け付けず、リーフはポフィン作りの準備を始める。  
「ここにある調味料を適当にいれて…」

リーフはあらかじめ準備しておいた材料をポフィンを作る鍋のような機械に入れ込んでいく…目分量で。

「次に木の実を入れる…」

木の実をそのままドボンと鍋の中に放り込む。

「そして焦がさないようにまぜまぜ…」

こぼれないのが不思議な位、高速で材料をヘラでまわしだす。

「なんとなく出来上がったと思ったたら出来上がり…」

そしてアバウトに終わった。

「これでライも立派なポフィンマスター！ イエイ…」

リーフはウインクしながら此方を指差してくる。

「あれ？ どうしたの？」

ライトは目を細めてリーフを見つめてる。

「今ので料理初心者が理解出来たら凄いよ…。」

ライトは嘆息まじりに告げる。

「なせばなる…」

話のもとに戻った！？ そして逃げた！

リーフは台所を飛び出して何処かに行ってしまった。台所に1人、とり残されてしまったライト。

「どうしよう…そうだ！」

ライトは何かを思いついたようで、急いで自分の部屋に向かうのであった…

「ライト…大丈夫かなあ？」

「僕は楽しみですけど…」

リビングではアクアとレイクがクリスマスの飾り付けをしていた。アクアは先程からライトの事が心配で台所に行こうかどうしようか迷っていた。

「ライトさんが料理するところは見たことありませんので僕も見に行きたいのですが…いまは飾り付けを先に終わらせましょう。」

「そ…そうですね。」

ライトもあんな風にみえて私よりもちゃんとしてるもんね、少しおっちょこちょいだけど…。

二人は暫く無言で飾り付けをしていく。

二人で窓の周りを飾り付けをしているところでアクアが唐突に話をきりだした。

「そういえばリーフさんとは上手くいつてるんですか？」

話をしだしたアクアを見ていたレイクの目は驚きで一瞬大きくなり、羞恥心からかすぐに目をそむけて飾り付けを再開する。

「レイクって面白い。リーフさんがいじりたくなるのもわかるかも。」

「…／／／／。」

レイクの青い頬もいまでは赤くなっている。アクアが笑いながらレイクを見ていると、レイクも飾り付けをしながら聞いてきた。

「そういうアクアさんもライトさんのことが好きなんじゃないんですか？」

「えっ！？ そっ、それは…」

今度はアクアが頬を赤く染め、たじろぐ。

「目が泳いでますよ？ それに僕は結構前から知っていましたし、いまさら隠さなくても…」

「えっ…。」

「だってアクアさんずっとライトさんのこと見てますからね。」

レイクが悪戯っぽくアクアに微笑む。

「皆に…言っていないよね？」

アクアがおどおどしながらレイクに聞く。

「別に皆、アクアさんがライトさんのことを好きなことは知ってると思いますよ？」

そっ、そんな！…じゃあもしかしたらライトにもバレてるの？

何故か自然に涙がこみあげてくる。

「どっ、どうしたんですか！？」

わからない。特に悲しいわけでもないのに涙がとまらない。  
「ごめんなさい！ 悪ふざけが過ぎました！ だから、ほら、泣き止んで下さいよ…。」

レイクはアクアに近寄って必死に慰める。

こんなところ 誰かに見られたら…

レイクがどのように対処すればいいか困っていると、リーフがリビングに入ってきた。

うわっ、なんという バッドタイミング…。

「あれ、どうしたの？」

リーフが此方の異変に気付いたようで近寄ってくる。

ヤバイ…。

レイクは若干後退りする。

「りっ、リーフさあ…ん…」

「どっ、どうしたの！？ まさか…」

アクアがリーフに泣きつく。

リーフはこれの元凶と思われるレイクを睨む。

「ごっ、誤解ですって！」

レイクは激しく首を横に振り、自分の無実を証明しようとする。

「問答無用！ かぐごっ…！」

リーフはレイクに『はっばカッター』をくり出す。

「うわっ！」

レイクは手で顔を隠す。

しかし、いつまでたっても『はっぱカッター』による痛みは訪れず、おかしいなと思って手をどかすとリーフが目前まで迫ってきていた。

「くらえっ！」

「ぐっ！？」

リーフがレイクに『すてみタックル』をお見舞いし、レイクは飾り付け用の道具の山に派手に吹っ飛ばされた。

「やめて下さいリーフさん！ レイクさんは別に悪くありません！」

「えっ？」

アクアが二人の間に割ってはいる。

「実は……」

アクアは泣いていた訳をリーフに話す。

「……………」。

「なあ〜んだ、そんなことだったの？」

「そんなことじゃありません！／＼」

リーフの言葉でアクアはふてくされてしまう。

そうこうしているうちにレイクが道具の山から這いずりでてくる。

「結局 僕は殴られ損じゃないですか……」

先程の『すてみタックル』が余程 痛かったのか、まだ片手で胸の辺りを押さえている。

「ええ〜別に損してないじゃん！ レイクって私から苛められていっつもよろこんでんじゃん だからさっきのも悦しかったんじゃない？」

「よろこんでないですっ！ それにリーの場合、うれしいの漢字が違っ気がします！」

レイクは急いで立ち上がり、弁明しようとしたが脚に照明ランプの紐が絡まり派手に転ぶ。

「うわっ！」

ドタン！！ガッシャーン！ガラガラガラ…

「ああゝあ。いくつか道具が壊れちゃったかもね。」

「うつつ…。」

レイクはもう立ち上がる元気も無くなったようだ。床に突っ伏したまま呻いている。

「へえゝ、レイクさんってDMだったんですね。」

アクアのトドメの一言を聞いてついにレイクは力尽きた。

「…ところでさっきのことだけど別に気にしないでいいと思うよ？」

「何で…そう言いきれるんですか？」

「だって…」

—————。

その頃、台所では…

「ヘックシューーン！ あうつ…ズルズルズル。」

ライトがくしゃみをしていた。

「誰かが俺の事でも噂してるのかな…良い噂だといいいけど。」

ライトはポフィンを混ぜながら呟く。

「クリスマスかぁ…俺もそろそろ彼女ほしいなぁ…。」

アクアの気持ちも知らずにライトはポフィンを作っているのですた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7600z/>

---

記憶になった日常

2011年12月25日16時47分発行